たまむしの森
―谷川士清の会会報―

第20号
発行年月日
平成31年3月31日
谷川士清の会

それぞれの～やまとたましひを求めて～新しい御代に

代表　池村幸久

八町生まれの御縁からか代表の大任をお受けして4年が経とうとしております。この間、「守・破・離」、「衆知を集める」、「感謝協力」を基本観として会の「生成発展」を希求して参りました。

本年2月に20周年を迎える迄の先輩諸氏のご努力と最近とみに拡がった「津市観光ボランティアガイドネットワーク協議会」様を初めとする同志団体との協働、そしてこれらの諸活動を支えて頂く特別会員様の充実により一昨年には津市より「教育功労者表彰」を賜る栄誉に恵まれました。深謝と身の引き締まる思いであります。

会員より日日提案されるサジェスチョンには、含蓄の多いものばかりですが、最近こんな事がありました。尾市幹事が力説されました。「明治44年に谷川士清作詞、中田章（東京音楽学校（現在の東京芸術大学）教授）作曲で『やまとたましひ』と云う唄が創られている、皆は知っているのか？　この歌が市民、県民、国民の間に拡がれば、士清先生の顕彰に大いに役立つ」と。中田章氏は「早春賦」の作曲で有名。その子中田喜直氏は「夏の思い出」や「めだかの学校」、「ちいさい秋みつけた」の作曲者であります。

早速、行動開始。竹内令先生、谷岡経津子先生のサジェスチョンにより、声楽家、渡瀬容子先生の無償の慈愛に育まれました。ついには、長い間眠っていた士清先生の歌は津市に大いに縁のある作曲家、錦かよ子先生の編曲により新しい御代に姿を現す運びとなりました。

遅くても2020年度中には完成予定の、「新町会館（仮称）」には「士清教室（仮称）」も併設されて谷川士清の顕彰活動に大いに貢献できるものと会員一同喜んで居ります。その場で、地元新町小学校の児童の皆さんが継承してくれている「士清ソーレ」の踊りと再興された「やまとたましひ」の合唱、独唱、演奏とのコラボレーションは30周年に向けて新元号の下、新天皇と共に歩み始める日本国民の一員としても誠に晴れやかで麗しい情景を醸し出すものと想像して居ります。

来年は「日本書紀」編纂1300周年の年である事は言い続けて参りましたので「和訓の栞」と並ぶ士清先生のもう一つの大著作「日本書紀通証」をもう少し極める事は必須であります。

加えて、谷川士清先生は、医者であり、神道家、そして国学者、国語学者、その前には、人々を教え導く教育者であったと理解して居ります。レオナルド・ダ・ヴィンチのような天才であったのでしょう。「新町会館（仮称）」の創出と「谷川士清旧宅」との新たな関係性（回遊路の設定等）の構築はともすれば地盤沈下が言われる津新町駅西方の街創り、伊賀街道の活性化に結び付くかも知れません。世界を股にかけたサオリーナも眼中に入ります。

特別会員で長くお世話になっている三重交通㈱様のバスの行先名もサオリーナ行きに変わって居ります。何処かに「谷川ことすが？？前」があっても良いですね。薬膳を研究して、「ことすがどんぶり」とか「士清うどん」「ことすが蕎麦」があって、「食べたら体に良い、賢くなる」なんてワクワクしませんか？

「何故にくたきし身そと入とははそれと答へむやまとたましひ」。この谷川士清先生の辞世の歌意を私は、「貴方のベルーフ、天職、天命は何ですか？」と読み替えて来ました。「谷川士清書道コンクール」に参加してくれた児童、生徒の皆さんに、「士清先生は国学とお答えになられたけど、皆さんも書道でも良いけど、何か見極めてそれを一生の職業として社会貢献して下さいね」と訴えて参りました。

私の「働き方改革」。原義に立ち返って、個々人一人ひとりが自分を見つめ直し天職を見つけ努力を厭わず社会貢献する。これほど幸せな人生はないと思います。「風格ある県都」で谷川士清先生に御縁を得た全ての方がそうある事を確信して居ります。それぞれの「やまとたましひ」を見つけ、元気に活躍しましょう。